

「大きい声」と「大きな声」

佐々木文彦

キーワード：形容詞，連体詞，イ形容詞，ナ形容詞，連体修飾，電子テキスト

1 はじめに

台湾の学生たちを対象に授業をする機会があった。日本語について何か疑問に思うことはないかと問い掛けたところ、ある学生から「大きい声」と「大きな声」というのはどう違うのですか、という質問が出た。とっさに――学校文法で言うならば「大きい」は形容詞の連体形で「大きな」は連体詞というように品詞が異なるが、意味はどちらもほとんど同じである――などと答えたものの、「意味はほとんど同じ」というのでは答えたことになっていない。

「大きい問題」と「大きな問題」、「大きい家」と「大きな家」…などと思いつくままに例を挙げてみても意味や用法の違いは感じられず、やはり「意味はほとんど同じ」と言わざるを得ないのであるが、本当に違いはないのか。本稿では「大きい⇔大きな」のように語尾イとナが交替形をもつ語彙について、その意味・用法に違いがあるかどうか考察してみることとする。

2 国語辞典・副詞用法辞典の記述

「大きい⇔大きな」のように語尾イとナが交替形をもつ語彙は、管見の範囲では下記の8組である。

「大きい⇔大きな」「小さい⇔小さな」「おかしい⇔おかしい」「細かい⇔細かな」

「やわらかい⇔やわらかな」「あたたかい⇔あたたかな」「間近い⇔間近な」「手近い⇔手近な」

これらの意味・用法の違いについて手元の国語辞典（注1）に当たってみると、たとえば「大きな」の意味記述を参照すると「大きい」としか書いておらず、「大きい」との異同には触れていない。これに対して『現代形容詞用法辞典』（飛田良文・浅田秀子著、東京堂出版）ではこの交替形を持つ語彙について次のような記述がありイ形とナ形とで意味・用法に違いのあることが指摘されている。以下に引用する（一部用例の示し方等を変えてある）。

○「おおきい」の解説（97ページ）

名詞にかかる修飾語として用いられた「おおきい」は、多くの場合「おおきな」に置き換えられるが、「三百円ですか。すいません、今**おおきい**のしかないんです」では「おおきな」で高額紙幣は意味しない。また、「うちの**おおきい**兄さんに聞いてみるよ」で「おおきな兄さん」というと体の大きな兄を意味するのが普通になり、いちばん年長の兄を意味することは少なくなる。

大きい兄さん。（最年長の兄）

大きな兄さん。（体の大きな兄）

○「大きな」の解説（97・98ページ）

「おおきい」の、名詞を修飾する用法に、ほぼ似たような意味で用いられる語。（中略）

「おおきい」に比べると意味の幅が狭く、具体的な大小についての意味で用いられることが多い。たとえば、（1）（引用者注；形態・数量・年齢などが大である様子を表す意味領域）においては形態・容量の大きいことが「おおきな」の中心的な意味となり、年齢・成長などはふつう意味しない。

①あんまりおっきなことを言うなよ。

②ミスした本人がおおきな顔してやがる。

③半人前のくせにおおきな口をきく奴だ。

④「早く結婚したら？」「おおきな御世話」

は「おおきな」を使った慣用語である。このうち②の「おおきな顔をする」、③の「おおきな口をきく」、④の「おおきな御世話」は「おおきい」に置き換えられない。

○「ちいさい」の解説（351ページ）

名詞にかかる修飾語として用いられた「ちいさい」は、多くの場合「おおきな」に置き換えられるが、（1）⑦では「ちいさな妹」というと。体の小さな妹を意味するのが普通になり、いちばん年少の妹を意味することは少なくなる。

小さい妹。（最年少の妹）

小さな妹。（体の小さな妹）

○「ちいさな」の解説（351・352ページ）

「ちいさい」の、名詞を修飾する用法の代わりに、ほぼ似たような意味で用いられる語。（中略）「ちいさい」に比べると意味の幅が狭く、具体的な大小を表す意味で用いられることが多い。たとえば、（1）においては形態・容量の小さいことが「ちいさな」の中心の意味となり、年齢・成長などはふつう意味しない。

「ちいさな」は「ちいさい」に比べると、対象に対する心理的傾斜の感じられる語で、ことに形態の小さいことに対する愛着を暗示することがある。「その悩みはあまりに大きくて、彼女のちいさな胸にはしまっておけなかった」で「ちいさな胸」というと、胸の形態が小さいのみならず、愛らしい心というニュアンスを含むことが往々にしてある。この場合「ちいさい」を用いるとやや客観的な表現となり、愛着の暗示を含まなくなることが多い。

小さな胸。（かわいらしい胸）

小さい胸。（形態の大きくない胸）

○「おかしな」の解説（101ページ）

「おかしい」の名詞を修飾する用法の代わりに用いられる語。ただし「おかしい」のすべての意味に対応するわけではない。

笑いたくなるように滑稽な様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。ただし、この意味ではあまり用いられず、ふつうは「おかしい」のほうを用いる。

(2) 人や物事が普通ではなく、不審な様子を表す。ややマイナスイメージの語。「おかしな」を用いると、ふつう(2)の意味になるので、全く同じ文脈で「おかしい」と「おかしな」が用いられると、次のようなニュアンスの違いが生ずる。

おかしな顔をされた。（不審そうな顔をされた）

おかしい顔をされた。（笑いそうな顔をされた）

「急に彼女が現れたのでおかしな話になっちゃった。」「おかしなもので、奴の顔を見たら元気が出てきた。」は慣用句で、「おかしい」に置き換えられない

○「やわらかい・やわらか」の解説（574・575ページ）

「この出版社はやわらかい本もつくる」の「やわらかい本」は通俗的な内容の本という意味である。この「やわらかい」は「やわらか」に置き換えられない。

「やわらかい」は「おだやか」や「まろやか」に似ているが、「おだやか」にある落ち着きの暗示、「まろやか」にある甘さの暗示は「やわらかい」にはない。

やわらかな味。（薄くて刺激の少ない味）

以上を整理すると次のようになる。

- 1) 「大きな」「小さな」は「大きい」「小さい」に比べると意味の幅が狭く、具体的な大小を表す場合が多い。例えば「兄」「妹」などと結びついた時に次のような意味になる。

大きい兄さん（最年長の兄） 大きな兄さん（体の大きな兄）

小さい妹 （最年少の妹） 小さな妹 （体の小さな妹）

- 2) 慣用句表現として

○「おおきな顔をする」「おおきな口をきく」「おおきな御世話」

×「おおきい顔をする」「おおきい口をきく」「おおきい御世話」

- 3) 「ちいさな」は「ちいさい」に比べると、対象に対する心理的傾斜が感じられ、次のような解釈が生じる。

小さな胸。（かわいらしい胸）

小さい胸。（形態の大きくない胸）

- 4) 「おかしい」は滑稽な様子、「おかしな」は不審な様子をそれぞれ表すのが普通であり、次のような解釈が生じる。

おかしな顔をされた。（不審そうな顔をされた）

おかしい顔をされた。（笑いそうな顔をされた）

5) 「やわらかい⇔やわらかな」については次のような意味・用法の相違がある。

○やわらかい本（通俗的な本）

×やわらかな本（通俗的な本）

○やわらかな味（薄くて刺激の少ない味）

×やわらかい味（薄くて刺激の少ない味）

上記1)～5)の記述は実際の用例と一致するであろうか。一つ一つ読むとなるほどと思うのだが、例えば2)については次のような反例がある。

「おい、大きい顔をするのはよせ、ドブ鼠のくせに一人前の口をきくのはよせ」（大江健三郎『戦いの今日』）

無論反例が一つでもあれば上記の記述が誤りであるというわけではないが、なるべく多くの用例の中から意味・用法を確認した方がよさそうである。そこで、電子テキストの形で公開されている文学作品を資料として用例を検索し、分析してみることにする。

3 用例調査の方法と調査結果の概要

「大きい⇔大きな」「小さい⇔小さな」「おかしい⇔おかしな」「細かい⇔細かな」「やわらかい⇔やわらかな」「あたたかい⇔あたたかな」「間近い⇔間近な」「手近い⇔手近な」、以上8組の語彙の使用状況について、『新潮文庫の100冊』（注2）の中から現代語訳作品である『新源氏物語』と翻訳作品を除いた66冊、さらに光文社「カッパノベルス」（注3）から138冊、計204冊を選んで調査を行った。

調査の目的は「大きい声」と「大きな声」のように「大きい」と「大きな」が交替可能である場合についての使用状況を観察することであるから、対象とする用例は「大きい」については名詞を修飾する例に限るのは言うまでもないが、

「その惨状が予想外に大きいこと、関東大震災を遥かに越える被害であることが口づてに伝えられてきた。」（北杜夫『楡家の人々』）

のような形式名詞を修飾する例は除外する。（注4）

このようにして検索して整理して得たのが表1の結果である。

表1 全体の使用度数と割合

	大き～	小さ～	おかし～	手近～	暖か～	細か～	柔らか～	間近～
イ	557	622	76	2	341	335	273	6
ナ	4423	3406	381	38	48	80	182	4
合計	4980	4028	457	40	389	415	455	10
ナ/合計	88%	85%	83%	95%	12%	19%	40%	—
	～ナが圧倒的に優勢				～イが圧倒的に優勢		～イが優勢	

この表が示すように

「大きな」「小さな」「おかしな」「手近な」……「～ナ」の方が圧倒的に優勢
 「暖かい」「細かい」……「～イ」の方が圧倒的に優勢
 「柔らかい」……「～イ」の方がやや優勢

という傾向が見られる（「間近い・間近な」はいずれも使用度数が低いので比較しない）。

「大きな⇔大きい」などを見ると「大きな」の方が圧倒的に優勢であるが、これは何を意味するのか。また、『現代形容詞用法辞典』が指摘するような意味・用法の違いが用例の傾向から見て取れるのか、次節で項目別に検討する。

4 用例分析

まず、第2節でまとめた『現代形容詞用法辞典』の記述の整理1)～5)について順に用例を見ることにする。

1) 「大きい兄さん」「小さい妹」の例

用例中に「大きい(な)兄さん」「小さい(な)妹」の例はないが、

「大きい姉さんが死んだんは犬や猫を仰山殺した祟りやとみんな云うてるでえ」（有吉佐和子『華岡青洲の妻』、他に同様の例1例）

とあり、これは年長の姉を意味する例である。また、弟については次のように7例ある。

- ①「私はその小さな弟からこれは兎これは栗鼠、それからこれは雉子と、それらの異様な足跡を
一々教えて貰っていた」（堀辰雄『風立ちぬ』）
- ②「あの小さな弟の姿が、裸の木と木との間から見え隠れしている（堀辰雄『風立ちぬ』）」
- ③「その小さな弟は、それを聞くと急いでその方へ駆けて行ってしまった」（堀辰雄『美しい村』）
- ④「その生意気ざかりの男の子は小さな弟を連れ去りながら、私の方をば振り向こうとしなかった」（堀辰雄『美しい村』）
- ⑤「小さい弟や妹がまだ五人もいる」（山本周五郎『さぶ』）
- ⑥「得次は白い眼をして、小さい弟をにらみつけた（山本有三『路傍の石』）」
- ⑦「十二三になる男の児が小さい弟の手を引き」（志賀直哉『真鶴』）

①～④は「小さな」の例で、年少でありかつ体が小さいことを表している。ただし出典を見れば明らかなように「小さな弟」という表現を用いているのは「堀辰雄」だけであるということに注意しておく必要があるようである。⑤～⑦は「小さい」の例であるが⑥の「小さい弟」は捨夫という名の末の弟であり、⑤も⑦も「年少の」という意味が文脈から見て取れる。

2) 慣用句「おおきな顔をする」「おおきな口をきく」「おおきな御世話」

まず、「大きい(な)顔」に相当する例は全部で39例あり、そのうち文字通り顔が大きいことを表す例は15例あり、その中には

「そして黒く光っている大きい顔を傾けて昏れのこる空をあおぎ」(大江健三郎『飼育』)

のように「大きい顔」となっているものが2例ある。

一方態度が大きいという意味の慣用句になっている例は全部で24例であるが、「大きな顔」が22例、「大きい顔」で態度が大きいことを表すのは、

「おい、大きい顔をするのはよせ」(大江健三郎『戦いの今日』)

という例(同じ台詞の繰り返しで計2例)であり、これも「大江健三郎」のみの例である。

次に「大きい(な)口」に相当する例は全部で32例あり、やはり文字通り口が大きいことを表す例が27例、そのうち「大きい口」となっているのは1例のみである。慣用表現の5例は全て「大きな口」であった。

「大きなお世話」の例は15例あり、すべて「大きなお世話」となっており、「大きいお世話」という例はなかった。

以上まとめると、これら三つの慣用表現に関してはほぼ皆「大きな～」の形になっているが、大江健三郎の用例に「大きい顔」があること。また、慣用句ではない「大きい(な)顔・口」についても「大きい～」の形になっているものは極めて少ないといえる。

3) 「小さい胸」と「小さな胸」

「歓喜と哀傷とが一緒になって小さな胸の中を往来するということは」(島崎藤村『破戒』)

のような例は全部で6例あるが、そのうち「小さい胸」となっているものが1例ある。

「恐ろしさと不安に小さい胸は押しつぶされて」(尾崎士郎『篝火』)

『現代形容詞用法辞典』が指摘する「対象に対する心理的傾斜」の有無を判断するにはさらに詳細に用例を分析する必要があるようである。

4) 「おかしい顔」と「おかしな顔」

「顔」と結びつく例は次の2例のみである。

「それは、丸顔で愛嬌があるという意味でいったんだよ。べつに、おかしな顔っていうわけじゃない」(藤枝ちえ『将門の秘密』)

「彼はごちそうになりたいような、なりたくないような、おかしな顔をしながら、丸い、柔らかいものを見つめていた」(山本有三『路傍の石』)

前者は「滑稽な」の意味で、後者は「不審な」に近い意味と考えられる。

『現代形容詞用法辞典』の記述によれば「おかしい」は滑稽な様子、「おかしな」は不審な様子をそれぞれ表すのが普通であるとのことであるが、「おかしい」の全用例76例のうち「滑稽」の意味を表すものはわずかに5例であり、他は、

「社長秘書にしてはおかしい発言である」（赤川次郎『女社長に乾杯！』）

のように「不審」の意味を表すものがほとんどである。

5) 「やわらかい本」「やわらかな味」

「本」「味」に相当する例は見当たらないが、「やわらかい声」「やわらかな声」がいずれも5例、「やわらかい口調」が5例に対して「やわらかな口調」が4例と例数は拮抗しており、その他の例を見ても「やわらかい」と「やわらかな」の意味の違いを示すような用法の違いは見出されない。

以上、1)～5)の順に『現代形容詞用法辞典』の記述を追うように用例を分析してみたが、1)と2)については抽出した用例から妥当であると判断できそうであるが、3)～5)についてはさらに別の角度から検討する必要があると思われる。

また、1)で見た堀辰雄の例や「大きい顔をする」という大江健三郎の例などを見ると書き手によって「大きい⇔大きな」の用法に違いがあるのではないかという疑問も生ずる。そこで、作品別の使用頻度を見てみることにする。

5 作品別使用頻度

新潮文庫について「大きい⇔大きな」「小さい⇔小さな」「おかしい⇔おかしな」の使用頻度を比べたのが表2である。数値は例えば、

$(\text{「大きな」の用例数}) \div (\text{「大きな」} + \text{「大きい」の用例数})$

として使用率をパーセントで表している。「―」は「大きい」も「大きな」も使用されていない場合である。

表2 「大きな」「小さな」「おかしな」の作品別使用頻度

作品	著者	大きな	小さな	おかしな
雪国	川端康成	13%	0%	100%
世界の終りとハードボイルド	村上春樹	96%	99%	50%
風立ちぬ・美しい村	堀辰雄	90%	99%	100%
痴人の愛	谷崎潤一郎	90%	91%	100%
人間失格	太宰治	59%	0%	―
モオツァルト・無常という事	小林秀雄	95%	100%	0%
こころ	夏目漱石	100%	86%	―
青春の蹉跎	石川達三	100%	90%	―
にぎりえ・たけくらべ	樋口一葉	100%	100%	―
人生論ノート	三木清	100%	33%	―
山椒大夫・高瀬舟	森鷗外	15%	0%	0%
焼跡のイエス・処女懐胎	石川淳	6%	6%	100%
羅生門・鼻	芥川龍之介	77%	50%	0%

小僧の神様・城の崎にて	志賀直哉	57%	15%	100%
黒い雨	井伏鱒二	98%	79%	—
小さき者へ・生れ出づる悩み	有島武郎	94%	94%	100%
遠野物語	柳田国男	—	—	—
野菊の墓	伊藤左千夫	60%	100%	0%
金閣寺	三島由紀夫	96%	96%	100%
破戒	島崎藤村	100%	100%	50%
歌行燈・高野聖	泉鏡花	89%	100%	—
友情	武者小路実篤	75%	—	—
路傍の石	山本有三	91%	46%	100%
放浪記	林芙美子	38%	32%	75%
あすなる物語	井上靖	23%	3%	—
野火	大岡昇平	93%	93%	—
李陵・山月記	中島敦	78%	50%	67%
ビルマの豎琴	竹山道雄	100%	100%	100%
銀河鉄道の夜	宮沢賢治	100%	94%	100%
一握の砂・悲しき玩具	石川啄木	—	—	—
冬の旅	立原正秋	90%	100%	100%
檸檬	梶井基次郎	82%	33%	0%
人民は弱し官吏は強し	星新一	100%	100%	100%
二十四の瞳	壺井栄	90%	92%	—
点と線	松本清張	77%	50%	100%
山本五十六	阿川弘之	92%	86%	100%
アメリカひじき・火垂るの墓	野坂昭如	80%	65%	0%
聖少女	倉橋由美子	89%	25%	50%
草の花	福永武彦	100%	100%	100%
戦艦武蔵	吉村昭	91%	100%	—
砂の女	安部公房	100%	100%	100%
孤高の人	新田次郎	99%	49%	100%
沈黙	遠藤周作	100%	92%	100%
死者の奢り・飼育	大江健三郎	0%	41%	0%
パニック・裸の王様	開高健	100%	97%	—
楡家の人びと	北杜夫	88%	94%	85%
華岡青洲の妻	有吉佐和子	95%	97%	0%
さぶ	山本周五郎	93%	90%	100%
忍ぶ川	三浦哲郎	100%	97%	100%
雁の寺・越前竹人形	水上勉	96%	55%	100%
砂の上の植物群	吉行淳之介	94%	80%	100%
太郎物語	曾野綾子	89%	86%	83%
風に吹かれて	五木寛之	97%	92%	100%
国盗り物語	司馬遼太郎	93%	97%	91%
剣客商売	池波正太郎	100%	100%	50%
塩狩峠	三浦綾子	99%	93%	100%
ブンとフン	井上ひさし	100%	100%	100%
エディプスの恋人	筒井康隆	100%	95%	100%
花埋み	渡辺淳一	93%	96%	100%
コンスタンティノーブルの陥落	塩野七生	100%	100%	—
二十歳の原点	高野悦子	100%	78%	100%
一瞬の夏	沢木耕太郎	97%	94%	67%
若き数学者のアメリカ	藤原正彦	97%	87%	0%
錦繡	宮本輝	100%	97%	100%
女社長に乾杯！	赤川次郎	94%	100%	50%
新橋烏森口青春篇	椎名誠	89%	89%	75%

これを見ると、「川端康成」「太宰治」「森鷗外」「石川淳」「林芙美子」「井上靖」「大江健三郎」に他の作家と際立った違いが見られる。この違いが作家の語法の特徴によるものなのか、あるいは作品の内容によるものなのかなど、詳細に検討しなくてはならない問題であるが、今後の課題とする。

最後に、標題の「大きい声」と「大きな声」については「大きい声」が40例、「大きな声」が400例と、「大きな」の使用率が91%という平均的な数値を示しているが、用法に違いがあるかということ、

「智子がわざと大きな声でしゃべっているのは、要するに亭主が〈部長に〉なったと近所へ知らせたいからなのである」（赤川次郎『女社長に乾杯！』）

「そこへ、どやどやと四五人づれではいつて来たのが、向うの席を占めると、すぐ大きい声でしゃべり出した」（石川淳『マルスの歌』）

といった具合で、どうも何らかの用法の違いがあるようには思われない。前後の構文環境を精査するなど、機会を改めて考えたい。

〈注〉

（注1）（三省堂新明解国語辞典、小学館現代国語例解辞典、新潮現代国語辞典、旺文社詳解国語辞典、学研現代新国語辞典改訂新版など）

（注2）（新潮社、CD-ROM版）

（注3）（光文社電子書店）

（注4）「大きい」については「大きい」「おおきい」、「暖かい」については「暖かい」「温かい」「あたたかい」など、漢字表記や送り仮名が異なるものも含めて検索してある。